



九条プロクはらまち

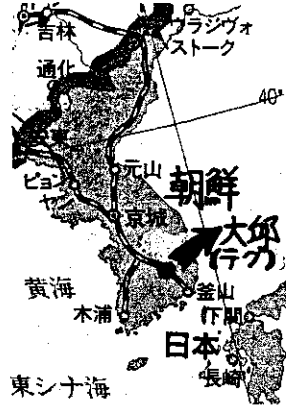
「はらまち九条の会」ニュース No. 3 3

2007(平成19)年8月15日(水)発行

<1945(昭和20)年8月15日はもちろん、第二次世界大戦(太平洋戦争)終了の日>

●**第二次世界大戦**とは、1939(昭和14)年9月1日のドイツ軍のポーランド侵入から、1945(昭和20)年8月15日の日本のポツダム宣言受諾まで、欧・中東・アジア・太平洋全域での世界的規模の大戦争。日独伊などの枢軸国側は9ヶ国、米英仏ソ中など連合国側51ヶ国が参戦。死者だけでも4,000万人以上と推定。

●**太平洋戦争**とは、1941(昭和16)年12月8日の日本軍による米国ハワイの真珠湾攻撃から、1945年8月15日の日本のポツダム宣言受諾まで、主にアジアや太平洋側全域での日米英中蘭間中心の戦争。



私ガリユと小六の三年の兄、後に中学を手に持ち、そのち、その後三年の兄と小六の



六十二年目の終戦の日によせて
松本道子

小学六年の時 朝鮮で終戦を迎える

六十二年前の昭和二十年八月十五日の終戦を、小学六年生だった私は、朝鮮の大邱(テグ)の駅長官舎で迎えました。太陽がキラキラ照りつける暑い日だったことを記憶しています。

家族は、大邱駅駅長だった四十八歳の父、四十二歳の母、子どもは男三人、女四人の七人で兄は二歳で亡くなっていたので八人の大家族で、私は次女でした。

三陣に分かれて日本に引揚げ

その終戦の日から慌ただしい雰囲気の中を充たし、命じられるままに、幼くして亡くなった兄の遺影のある仏壇、七段飾りのおひな様、父の文学全集等を、庭や風呂場で燃やす手伝いをしました。

十月初旬だったと思いますが、私たち家族は朝鮮から日本へ、引き揚げを始めました。父は日頃から朝鮮の人々に親切だったので、幸い襲撃されることもなかったそうです。

第一陣は、女性にアメリカ人に暴行されるといふデマがとび、女学校を卒業していた十八歳の姉と、小学五年生の妹の二人が官舎を後にしました。第二陣は、母が生後十ヶ月の妹

を背負い、持てるだけの荷物、手に持ち、その後三年の兄と小六の

ツクサクを背負ってつづき、朝鮮の方の隣れみの視線を感じながら官舎を後にしました。第三陣は、全ての後始末を終え、十二月に父が引き揚げて来ました。

第二陣の私たちは、釜山での収容所生活を経て、関釜連絡船にて住み慣れた朝鮮を後にしました。下関港が使用不能というので、山口県の仙崎漁港に接岸されました。その後、山口市のお寺に収容

されました。子供だったこともあって、全てもの珍しく、あまり苦痛とも感じなかったと回想いたしております。ただ、母の疲れが極限に達していたため、兄が妹を抱っこしつづけて歩いたり、私も何かと世話をしていたので、今考えますと、

新型爆弾が落とされたという焼け野原の広島を歩いたらしいのですが、記憶としてあまり残っていないのが残念です。後日、母が十ヶ月の妹を京都駅に置いてこようかと思つたと話しておりました

が、その妹も今年六十三歳で孫二人に囲まれて生活しています。

富士山の姿にやっとな堵感を
東海道線の汽車の中は、復員兵で通路まで一杯で、歩くところもない混雑でしたが、静岡あたりで車窓より見えた青空にそびえ立つ富士山の姿に、やっとな堵感を覚えたという安堵の思いで胸一杯になった記憶は、生涯忘れえぬ思い出の一コマです。

その後、上野駅夜8時発の無灯の貨車に乗り込み、月明かりの中にかすかに

見える田畑や木々を眺めたりして、朝五時に原ノ町駅に降り立ちました。冷たい清々しい朝の空気を肌に感じ、今もその感触を忘れることができません。原町の今の錦町あたりにあった祖父の家を離れに、一家八人の仮住まいの生活が始まりました。

道路も水も電気もない開墾生活
翌年三月、鹿島の父の実家の山を借り、開墾して家族全員で移り住みました。道路も水も電気もない掘立小屋での生活。朝鮮での生活とは大きな落差もあり、母のストレスは極限に達して、父の顔を見ると罵詈雑言、子供達にも同じで、楽しい家庭生活は皆無に近い状態になってしまいました。

母を恨んだこともありましたが、今考えますと、まず父は生活の水を確保すべきだったと思うのです。家事をする母の苦しみを今あらためて思います。思春期であった私は、ただ黙々と親に従い、一つ越えた農家からの水運びや、薪取り、炊事と、母の顔色を見ながらの生活でした。私が枯れ木を一杯背負って帰ってくる時だけ母は笑顔で、「道子は新取りがうまいね」とほめてくれるのです。

心にも大きな傷を負わせた戦争
女学校へは通わせてもらいましたが、物事を斜めに見る暗い性格に傾いてしま

い、なかなか友人の中へ入ることが出来ず、心に癒されない傷を負い、全てに無理する自分になり、心から自分を愛しむこともせず、笑いを失った青春。戦火には遭わなかった私ですが、悔いが多く残ってしまいました。このように人の心にも大きな傷を残してしまう戦争だけは避けなければと強く心に思っています。

(裏ページにつづく)

(表のページより)

また、九十三歳で静かにこの世を去った母の苦しみは今も理解出来る歳になり、そのたくましさにも脱帽しております。

命の大切さを若い人に伝えたい

私は四十年間、看護婦として生きてきました。若し、今、この乱世の様な社会に生きて、若し人達の人生観の甘さと、命を粗末にする報道を見聞きする度に、慄然とした思いに駆られます。この事は、私達にも罪の一端があるのではないかと、思います。自分があまりにもひどい辛い思いをしたので、子供にだけはと、辛い思いで、甘く養ってしまっただけではないかと云うことです。人生を生きるのには、きびしいのです。最後まで生き抜く強さと、命の大切さを、若い世代に伝えなければと思っております。

人の一生を踏みにじる戦争は絶対いけない!

大人のエゴで始まる戦争は、絶対NOです。弱者がいつも泣いている姿は、もう沢山です。それでなくとも、地球温暖化による異常気象におびやかされている今があります。せめて戦争にだけは巻き込まれない様にしなければなりません。六十二年間、平和を守ってくれた憲法九条を変えることは、その悪が美しい言葉で、国民をあざむくことだと思えてなりません。六十二年間一度も戦争をしなかったことを誇りに思い、世界中の青少年にアピールしてゆく「九条の会」の役割は、素晴らしいものであります。勉強させていただいたお陰で、理解することが出来まして感謝しています。

今の私は七十四歳で、行動する力もありませんが、草の根が大きく成長し、人の一生を踏みにじる戦争の絶対阻止と、平和の実現を心より願っております。

(はらまち九条の会会員・原町区在住)

▼2007年8月5日の『毎日新聞』
全国版第1面

鈴木安蔵や憲法研究会の業績を知らずともしないで、今更無知で恥かしい「暴論」

戦後 憲法草案提言の鈴木安蔵氏

GHQが「評価」の書簡

最高司令官に「米案に影響」裏付け 担当者が送付

終戦後、新憲法制定を

検討する立場にあった連

合軍總司令部(GHQ)

の担当者、民間の「憲

法研究会」で憲法草案要

綱をまとめた憲法学者、

鈴木安蔵氏の言論活動に

注目する内容の書簡をダ

グラス・マッカーサー最

高司令官に送っていたこ

とが米公文書で明らかに

なった。書簡の日付は1

945年10月23日、日

自主的な憲法が できた可能性も

古関彰一・独協大教授

の話、鈴木氏に対するGHQ

の手紙から注目を集めた

GHQ草案への影響につ

ながった。日本国憲法は、

本政府の憲法調査が始ま

ったばかりの時期。同研

究会の草案はGHQの憲

法草案に影響を与えたと

されるが、さらにその関

与を裏付ける資料として

注目されそう。

(社会面に連載「憲法の

孫たち」)

書簡を送ったのは、米

国務省から派遣されたGHQ

政治顧問事務所のエ

マソン所員。文書は憲

法改正の

必要性を明確に指摘して

いる」と評価。「政党内

閣が発展しなかったの

は、大日本帝国憲法に原

因がある」と鈴木氏の

法学者、原秀成氏が米国

立公文書館で入手した。

「憲法改正についての

日本人の意見」と題する

書簡では、新聞紙上で活

発になってきた憲法学者

らの意見を紹介。

鈴木氏を「憲法改正の

必要性を明確に指摘して

いる」と評価。「政党内

閣が発展しなかったの

は、大日本帝国憲法に原

因がある」と鈴木氏の

主張に同調した。

また、エマソン所員

は「広い討論や議会の

修正の機会を与え、新憲

法が受容されることと重

要だと訴えた。マッカ

ーサー氏はこの提案を取

の上、46年3月6日、政

府案として公表された。

鈴木氏は、高野岩三郎

元東大教授らと7人で45

年11月に憲法研究会を発

足させた。12月26日「憲

法草案要綱」をまとめ、

首相官邸とGHQに提出

した。毎日新聞は一面で

報道したが、当時はあま

り注目されず、政府の旧

憲法調査会が64年にまと

めた報告書で「GHQ草

案の起草者によって相

互に重要視され参照され

た」と一定の評価を受け

た。

原氏は、日米公文書を

調査し「日本国憲法制定

の系譜」(日本評論社)

に就いた段階で、国務省

から派遣された担当者が

鈴木氏に注目を集め、広い議

論を求めたことは重要

だ。憲法草案要綱は、

戦前から平和と自由を求

めた言論の結晶だった。

GHQも日本人の自発的

な意見を尊重し、憲法起

草への関与を最小限にし

ようとしていた」と話し

ている。【上野史絵



憲法学者 鈴木安蔵
(1904~1983)

○今年8月5日付の『毎日新聞』は、第一面で鈴木安蔵氏の功績を高く評価する「上の記事」を発表。また同日『毎日新聞』の他ページでも、憲法研究会の業績や「憲法の孫たち」というシリーズで、憲法成立がアメリカからの「押しつけ」でなく日本人自身の発想という真実であることを証明してくれています。○同封の「別紙プリント」『毎日新聞』コピー」などをご覧ください。